



夏目漱石

近代日本の思想家 6

瀬沼茂樹著

東京大学出版会

瀬 沼 茂 樹

略 歴 1904 年 東京に生まれる

1929 年 東京商大卒業

現 在 文芸評論家 日本大学教授

主要著書 「島崎藤村」(角川書店)「現代文学」(「昭和の文学」)(絶版)「近代日本文学のなりたち」(角川書店)「評伝・島崎藤村」(実業の日本社)「近代日本の文学」(教養文庫)「現代文学の条件」(河出書房新社)「日本文学・世界周遊紀行」(全六巻・角川書店)「近代日本文学の構造」(二巻・集英社)「本の百年史」(出版ニュース社)

現 住 所 東京都中野区中野 3 丁目 44 の 16

夏 目 漱 石

検 印

1962 年 3 月 20 日 発 行

1967 年 9 月 25 日 第 3 刷

廃 止

定 価 580 円*

© 著 者 瀬 沼 茂 樹

発 行 者 福 武 直

発 行 所 財団法人 東京大学出版会

東京都文京区本郷 東大構内 (811) 8814 振替東京 59964

目次

序 説

第一章 作家以前の思想形成

一 古典的教養——江戸町人文化と漢書

二 英文学と近代個人主義

三 厭世主義と慈憐主義

四 漂泊——Xなる人生

五 ロンドンの経験——方法論的自覚

第二章 大学の講義——文学理論の構築

一 形式論

二 内容論

三 十八世紀英文学——批評論

四 価値論

第三章 初期の作品

一 文学的出発——『吾輩は猫である』と『漾虚集』

二 『鴉籠』と『野分』

三 職業作家の誕生——『虞美人草』

四 一つの転機——『坑夫』『文鳥』『夢十夜』

第四章 第一の三部作

一 『三四郎』——『永日小品』

二 『それから』——『満韓とどこどこ』

三 『門』

第五章 社会と自分

一 修善寺の大患——『思ひ出す事など』

二 職業論

三 現代文明論

四 社会観

五 現代道德論

第六章 第二の三部作

一 『彼岸過迄』

九

九

一〇

一〇

一一

一一

一二

一二

一三

一三

一四

一四

一五

一五

一六

一六

一七

二 『行人』

三 『ころ』

四 『私の個人主義』

第七章 晩年

一 『硝子戸の中』前後

二 『道草』

三 『明暗』

夏目漱石年譜

夏目氏系譜

主要参考文献

あとがき

三六

三四

三三

三二

三一

三〇

二九

二八

二七

二六

二五

序 説

夏目漱石という偉大な文学者の思想を考えようと思うと、彼がスウィフトについて語った言葉を、初めに思いだす。

「何だかスウィフトなるものが重たい石の様に英国の真中に転がつてゐる様な心持がする。さうして此石が一つあるために、左右前後は無論、全世界に蠢動する人間と名のつくものが悉く石に変化した様に思はれる。……自から石を以て居ると共に、他を片々たるごろ太石と見倣してゐる。それでゐて断えず氷の様な烟を吹き上げてゐる。」

序

これを読んでみると、いつかスウィフトを漱石とおきかえて、漱石がスウィフトを論じたことの意味をも離れて、自分勝手に解釈して、漱石を考えていることに気がつく。漱石はみずから冷然と石をもって任じていたのでも、またみずからのうちの「重たい石」を感じていなかったのでも、ないのである。しかしこの比喻によつて、たとえば漱石が近代日本の真中にどつかと位置を占め、そのために前後左右が劃然と秩序だつてくる大きな要石の役をしているように思われる。もちろん、漱石のほかにも、日本の文学者のなかで、森鷗外や島崎藤村もまたそういう重要な要石であつたことを知っている。しかし鷗外や藤村を加えても、漱石は要石の中の要石であつたと、わたしには考えられる。

漱石は英文学を学としておさめ、イギリス人以上に擢んでようと、だいそれた夢と抱負をいदैて、狂人扱いにされるまで苦闘した。「壺中大夢ノ人」であつたかもしれない。しかしこのだいそれた痴夢を痴夢として笑わない気魄や情熱があつたればこそ、素手で英文学の曠野にいどんで、一介のディレタントになり終らなかつたばかりか（優越した西洋文学に吸いこまれて、ディレタントに甘んじた外国文学者がなんと多いことか）、学としての英文学に開拓的偉業をなしとげて、まさにイギリス人以上の業績をのこした。外国文学の研究において、漱石あるがために、日本の英文学は明治の多くの英文学者たちを片々たる五郎太石にかえて、わたしたちにあるべき可能性を教えてくれている。これはひとり文学や英文学にかぎったことではなく、日本の学芸の全般にわたって、根源的に諸問題を同様に考えさせている。

考えてみると、英文学は漱石にとってさしずめ優越せる西洋文化に対決してゆく上で処理しなければならぬ一つの里程にとどまっていたであろう。外発的ならざるを得なかつた開化日本の運命を、それがために自己一身にひきうけて、いかに内発的ならしめるか、無謀にも近い荒行をなしとげ、温い人間の血をまで枯らしたとはいえ、前人未踏の業績に、これを具体的に教える一石であつた。そこに近代日本の歴史と社会とにあつて前後左右にふりわけて整理する「重たい石」としてのすぐれた独自の場所があつた。漱石は武士的ストイシズムと稀有な強靱な知力とを発揮して、近代日本と封建日本、新旧世代の対立を問題にしながら、そこからいち早く近代的自我の運命をも先取せずにはおられなかつた預言者の風貌をみせた。市民的な自由人として社会と個人との関係を考えても、

大胆に個人主義の貫徹を主張し、内容主義から社会の型の変化をもとめ、内容の変化にともない外形の変化は当然であると主張する進歩主義者であったから、近代日本の暗影にその将来をいち早く観取し、時と場所とに応じて無理のない社会を要求した真の愛国者でもあった。同時に機構化されていく社会において自己疎外される人間の運命を思い、近代自我の追求において「道義上の個人主義」が功利的には如何ともしがたいエゴイズムを掘りさげ、醜悪な人間の裸形に人一倍に絶望を味いもするのである。しかもこれがはたして社会的秩序の必要または改革によって解消できるかと、深く問うているようである。漱石は思想家として森鷗外のように社会主義に関心をしめすことがなかったけれども、そのためにかえって同時代の文学者の誰よりも柔軟な社会意識を鋭くみせて、事態を深く考えていた。

漱石は「譲歩のない冷静なスウィフト」のように「白眼にして無為なる庸人ではなかった」のだ。人生について真意義をさぐり、深くふれ、広く考える「文芸の聖人」でもあれば、思想の聖人でもあった。しかも人間漱石として、若くして人間の実存の深淵に当面し、「不測の変」に苦しみ、人間本然の姿に思いまどわなければならぬ「重たい石」を心の真中にもっていた。漱石の問題は自己自身への探求を普遍的な問題にたかめるところに、その風俗的なパースペクティブをも内部から支える吹きあげるような活力をもっていた。漱石の晩年の思想といわれる「則天去私」は、これあるがために“infinite longing”として初めから志向されていたけれども、人間の罪の重たさに行くべきところを探求して、長い労苦の遍歴のうちに、ただ単に伝統的日本、歴史的日本に還るための

指標の役をしたと考えることはできない。むしろ「自分の分にある丈の方針と心掛」で、病軀をひっさげて、いかなる伝統にも還ることを満足としない相對をこえた「絶對の境地」への探求であり、修業であつた。思想家であるとともに同時に文学者であつた漱石の人間の苦悩は人間全体の底にあるものであり、「死ぬか生きるか、命のやりとりをする様な維新の志士の如き烈しい精神」——この初心はいくたの経緯をへたにせよ、この意味で忘れられず、文学にも思想にも、とりくんでいった。漱石の誠実と真面目とは全生涯をつらぬき、「重たい石」の「重たい石」としての意義を發揮した。

漱石は悪戦苦闘の末に、業半ばにして恨みをのみながら、僅かに五〇歳にして果てていった。ほんとに今死んでは困る惜しい偉才であり、漱石の後に一人の漱石も生まれてはいない。どこまでも自己のうちから人間の苦悩をつかみだし、追求してうむことを知らなかった漱石の文学と思想は日本人の歴史的事実を今日もお照らしだす光であることをすこしもやめていない。わたしは漱石の文学と思想を、そのなりたちから、全幅にわたって、できるだけ克明に追求し、その諸問題を考えてみたい。

第一章 作家以前の思想形成

一 古典的教養——江戸町人文化と漢書

夏目漱石は、一八六七年二月九日、江戸牛込馬場下横丁（現在の東京都新宿区牛込喜久井町一番地）に生まれた。これは明治改元の前年で、慶応三年丁卯一月五日である。この年に生まれた文学者には正岡子規、幸田露伴があり、普通にこの年の生まれとされる尾崎紅葉、斎藤緑雨は、太陽暦でいくと、内田魯庵、山田美妙、徳富蘆花、北村透谷と同じく、一年年少である。さらに注意すべきことは、この九人のなかで、満足に大学教育を卒えたものは、ただひとり漱石があるだけであった。しかも漱石が後年『文芸と道徳』（明治四四年）という講演のなかで、「私は明治維新の丁度前の年に生れた人間でありますから、今日此の聴衆諸君の中に御見えになる若い方と違つて、どちらかといふと中途半端の教育を受けた海陸両棲動物のやうな怪しげなものであります」と自己紹介したところ、明治開化期という中途半端な海陸両棲的な時代に青少年期をすごし、またそれあるがためにこの時代の苦悩を自己一身にせおって、独特の自己形成、思想形成にすすみ出たのである。また純粹の江戸っ子は露伴、魯庵、漱石、紅葉の四人であり、町人階級の出身は後の二者であった。しかも漱石は紅葉が下町風の江戸職人（後に遊芸者）の出身であったのちがって、武士階級との間に立

つ中間的な立場にあった山の手風の郷土の出身であった。すなわち、父は江戸の「町方名主」といわれる由緒のある家柄の一人、夏目小兵衛直克といった。母は後妻で千枝といい、四谷大番町の質商、鍵屋こと福田庄兵衛の娘栄の三女であった。⁽¹⁾直克は明治維新後、露伴の父成延（しのぶ）と同じく区長の役をつとめたが、成延のように官界に足場をきずくことはできず、次第に家運を傾けていった。

漱石は五男三女の末っ子で、「歓迎されない子」であった。年老いた両親の末っ子は、世間普通の慣例では、溺愛をうけて、甘たれ子になるのが普通であるが、逆に「母はこんな年齒としをして懷妊するのは面目ない」（『硝子戸の中』）と、昔ふうには「恥じかき子」とみられ、冷ややかに遇されている。しかも「庚申の日」に生まれたために、大泥坊になるという迷信から、それを避ける意味で金之助と命名された。そこで生まれるともまなく里子に出され、また内藤新宿北町の「門前名主」塩原昌之助のもとに養子にやられた。塩原は浅草の戸長となり、諏訪町に移って、ここに数え年十歳まで育てられた。実家にひきとられ、誰の眼にもわかるほどそのことを喜んだが、漱石はやはり歓迎されはしなかった。自伝小説『道草』や随筆『硝子戸の中』をみると、養親の愛情は将来のための利己的な打算であり、やがて醜い家庭の不和が幼い子供に不安・不快をそそった。実父は「我楽多」固然に、むしろ冷酷にあつかった。実母は「品位のある床しい婦人」であり、漱石は「一番私を可愛がつて呉れた」という追憶をもらしているが、それはこの家の雰囲気の中でのことで、別に「甘く取扱はれた」わけではなかった。その母も漱石が一五の年に死んだ。要するに、少年漱石の俊敏な感受性は、養親の見せかけの愛情に我儘一杯にふるまっても、早くも愛が利己心の変形であるこ

とを知らなければならず、また実親の愛情をもとめて懷にとびこもうとしても、ひややかに突きはなされ、愛情の満足をうることができなかった。これが虚偽を憎み、神経質なまでに細心に理非曲直を弁別して進退する根性をやしなうとともに、その根柢に他人は他人、自分は自分という自己意識をさかんにし、つねに自己の言行を良心によって検討しながら、吟味反省する内向性をもっていた。そして人間の誠実をもとめ、正義をねがう性来の気象とともに、偏狹・片意地といわれるまでに、時には激越に癪癢を破裂させもした。そして漱石は「海にも住めなかつた。山にも居られなかつた」『道草』孤独のなかに、自分一人の世界をかたくなに理論的に筋を通して、やかましく生きなければならなかつた。

漱石のまわりには道楽者が多かつた。兄や従兄たちは江戸町人の伝統をひいて、「八笑人か七変人のより合ひの宅」のように、芝居の仮声や素人落語に興じくらす有様であつた（『僕の昔』）。またそういう気風をさそうものが親戚の遊女屋や芸者屋にあつた。兄弟中の一番の道楽者の次兄栄之助は父の愛蔵の書画刀剣類をもちだして女遊びの資にした。漱石もみずからみとめるように、こういう家族の下町風な「道楽者の素質」をもっていないわけではなかつたろうが、もともと下町とはちがつて、山の手のしもたやに育つたのだから、兄弟たちの道楽の素行がどういふ結果をもたらすかを俊敏にみわけ、人間の自然を毀損する実情をみてとり、兄弟たちへの軽侮と反感とをやしない、逆に遊興から遠いところにきびしく身を持つることを知つた。当然、兄弟たちの愛読してゐたであろう人情本などにも眼をさらし、江戸っ子らしい意気や粋や通や俠の意味を知つてゐたであらう。

ある程度、こういう江戸っ子気質にも親んだところから、寄席に講釈や落語をききにいくことを好み、江戸の町人文化のなかに生き心地のよさをさえ味わっていた。だから、後年、正岡子規に書きおくれた手紙には、乙にすました通人の口調をかり、また初期作品に洒落や地口を活用したりしている。さらにこれを演繹して日本人の国民性を「元来真面目気の少いとぼけた様な、そしてよく泣きよく笑ふ感じ易い国民」とみてとって、滑稽文学の可能性を考えている（『滑稽文学』）。そればかりではなく、藩閥政府、「お上」にたいする庶民伝来の反感や、成上りの資産家にたいする侮蔑や、官権・金権にたいする土性骨にとんだ叛骨を身につけていた。これは、明かに、同時代に生まれ、早く文学におもむいた尾崎紅葉が同じように江戸町人の伝統をうけつぎながら、消極的に戯作者氣質をみがいた仕方とは、本質的にちがっている。「滑稽趣味」を批判的にうけつぐ姿勢には、兄弟たちの放蕩を孤独にみまもりながらも、これを容赦できない俠氣——この江戸っ子氣質を発揮し、むしろここにこそ漱石の實質の働くところがあった。これは後にその一本気な性格として激しい公憤を投げだす方向に育てられていきもした。

漱石は、小学校を三たび転じて、一二歳のころ、一橋の東京府第一中学校（日比谷高校の前身）に入った。遊ぶ方が好きで、勉強をおろそかにし、二、三年で退学、むしろ「道草」にもひとしい、三島中洲の二松学舎に転じて、漢学を学んだ。明治初年の教育制度は学制や教科は形式的にはととのってきたが、實質はまだまちまちであった。漱石は小学校で優等賞に『勸善訓蒙』（箕作麟祥の『泰西勸善訓蒙』であろう）や『輿地誌略』（内田正雄の著）をもらった（『道草』）。前者は修身書、後者は

世界地理、このころの小学教科書には洋学者による「西洋の教科書の翻訳」が多く、たいていは漢文直訳体であった。⁽³⁾それはまさに「海陸両棲動物」のような怪しげな開明主義の啓蒙教育にちがいはなかった。しかししたしかことはわからないとはいえず、漢学の教師が作文などを教え、漱石もまたそのころの知識人の子弟と同じに早くから漢書に親んでいたであろう。『木屑録^{ぼせつろく}』の序に「余ハ儿时唐宋ノ数千言ヲ誦シ、喜ンデ文章ヲ作為ス」(原漢文とある「儿时」は、小学校のころから二松学舎にあるころまでを指すとみて、不当ではあるまい。現存の唯一の作文は明治一年の『正成論』であり、漢文直訳体である。後の『余が文章に裨益せし書籍』に、女性的な柔弱な和文体を嫌い、男性的な雄勁な漢文体を好むという意味のことを書いているほど、漢文体に親んでいた。「元来僕は漢学が好で随分興味を有つて漢籍は沢山読んだものである」(『落第』)ともいつている。そして漢学に親んだことから、文学をおもしろく感じて、「自分もやつて見やうといふ気がした」⁽⁴⁾それは一五、六歳の頃、中学生の時代であった(『処女作追懷談』)。漱石は漢学からすでに文学を解していたことがわかる。

漱石は子供のころから長い間の修業をして立派な人間になって世間へ出たいという明治人の尋常な出世欲をもっていた。日本語で普通学をおさめる中学の「正則」なコオスをえらんだのは、父のいつけであつたらしいが、また漢学流に「修業」の一つと考えていたであろう。しかし世間へ出るためには、明治の開明主義のもとでは、大学予備門(東京大学教養学部に相当する)につながる、中学の「変則」のコオスが近道であつたにちがいない。漱石の畏敬した長兄大一是「大学で化学を研

究してゐた」というが、漱石と同じように疳癪持で、漱石に英語を教え、疳癪を爆發させていた。しかし「英語と来たら大嫌ひで手に取るのも厭な気がした」(『落第』)ほどだから、英語で普通学を教える「変則」のコースを欲しなかったであらう。しかも実母千枝の死にあって、出世よりも、好きな漢籍にひたる出世間の態度に心をひかれるところがあった。漱石が二松学舎に入ったことには、こんなさまざまな動機があった。漱石が文学をやりたいと長兄大一到に相談して、「文学は職業にやならない、アツコンプリッシメントに過ぎない」と叱られて、むしろ職業にならない、ひそかに自分の志望とする「文学」を漢学にもとめたということも、「変物」の反抗心をそつたのではあるまいか。

漱石の漢文の教養は二松学舎の短い時期にほぼ素地を完成した。ここで漱石の修めた「漢学」はまだ学問としての漢学ではなかったであらう。もちろん、漱石の頭脳は十分に漢学を学問として成就させるだけのりっぱなものであった。しかし中学から二松学舎の少年期の教養は、その教科からみて、いわゆる「經史文」をふくむ「文学」の学習であった。すでに唐木順三や猪野謙二がいったように、⁽⁵⁾漱石は、一方において「唐宋数千言」(『木屑録』序)といった唐宋の詩文を範とした「文章の学」として、他方において「左国史漢」(『文学論』序)といった史書から觀得した「有用の学」として、文学を概念しはじめていた。前者は「風流韻事」の文学として、その俳諧的要素(滑稽的要素)をまで含めて、文人的要素を現し、後者は「経国済民」の文学として、その功利的要素(倫理的要素)や内面的倫理化を含めて、国士的要素を現している。この二つの要素は矛盾しながら、終

生、漱石のなかに生きているものである。しかし漱石は漠然と文学を志しながら、まだ文学に就くまでの決意は生まれていなかった。むしろ漢学によって経国の志をかきたてられたことが、当時寺小屋のような二松学舎に退いて、漢籍ばかり読んでいた生活から、逆に踏みきらせることになった。漱石のうちの庄屋の血が騒いだといつてよい。好きな漢籍を一冊のこらず売って、大学受験準備のために、一七歳で駿河台の成立学舎に入った。

「漢籍ばかり読んでこの文明開化の世の中に漢学者になつた処が仕方なし」（『落第』）といい、漢学そのものの思想的創造的エネルギーの前途に見切をつけて、大嫌いな英語の勉強による新しい思想的創造力をもとめはじめた。これは後に大学で「漢文科や国文科はやりたくない」と英文科を選択したのと同じく、好き嫌いを越えた明治の青年の選択、天下後世に名をとどめようとする青年の意気であった。だから『ナショナル英語読本』の巻二位しか読めない語学力をもって、スウィントンの『万国史』にぶつかり、やがてこれをこなすまでにすんでいった。すでに漱石は並々ならぬ語学力をみせていた。これは明治一六、七年のころのことである。一方に藩閥政府の開明政策——上からの近代化がすすめられるとともに、他方に「維新」の貫徹を下からの近代化として要求する自由民権の運動がやかましくなっていたときである。「今まで自分の抱いていた志望」は、「文明開化の世の中」では、漢学よりは洋学によって可能だとみてとって、その第一歩をふみだした。少年漱石には、つねに自己本然の欲求によって自己決定しなければやまない性根の通ったところがあり、したがってある種の内部の劇がはげしくたたかわれていたことが想像される。漱石は「別に之と云